

相互主観的コミュニケーション問題へのシステムの、言語論的接近

A Systemic and Linguistic Approach to Inter-subjective Communication

宮崎正史
MIYAZAKI Masafumi

〈目次〉

はじめに

1. システミックアプローチ
 1. 1. 関係性
 1. 2. ポリエージェントシステム
2. 相互主観性と内部モデル原理
 2. 1. 相互主観性
 2. 2. 内部モデル原理
3. コミュニケーション的行為と言語行為
 3. 1. オースティンの言語行為論
 3. 1. 1. オースティンの真理概念
 3. 1. 2. 行為遂行的発話
 3. 1. 3. 言語行為と目標追求行動
 3. 2. モデル表現
4. コミュニケーションモデル

おわりに

はじめに

コミュニケーションとは、自己と他者の間で“メッセージ”の交換を通じて取り結ばれる、特別の相互行為関係である。メッセージの媒体は言語、音声、文字、映像、記号、動作、表情、等々あらゆるものがメッセージ媒体となりうる。その媒体に託した「送り手」のメッセージ、ひいては「送り手」の意図・目的が「受け手」によって解釈され、その内容と「受け手」の意図に整合した応答がなされる。この過程は循環的である。「送り手」が今度は「受け手」として応答メッセージを解釈し、再び応答する。このようなコミュニケーション過程を観察すれば、その過程は解釈・意味づけの過程と、解釈内容と意図に整合する応答という行為の選択過程から成り立っていることが分かる。

本稿の目的は、システム理論の立場から言語行為論を再解釈し、このような構造を持つコミュニケーションをより明確に捉え、特別の相互関係の中で立ち顕われる様々なコミュニケーション問題を分析し、特徴付けるための基礎的考察を行なうことにある。なお、本稿は拙稿「コミュニケーションの一般モデルの構築に向けて」⁽¹⁾を、大幅に加筆・訂正し、関係性を捉える枠組みと、主観性を捉える視

座を明確にしたものである。

1. システミックアプローチ

1. 1. 関係性

対象をシステムとして認識する発想は、フォン・ベルタランフィが一般システム理論を提唱する以前においても、古くはアリストテレスの「全体は部分の総和以上の存在である」という、全体論的認識にその起源を見ることが出来る。システム認識の特徴は、その全体を構成する要素固有の性質よりも、要素間の関係性と、その関係の形成によって生み出される全体としての新しい性質や特性、すなわち創発特性 (emergent property) に注目するという認識のしかたにある。集合論の言葉を借りれば、システムSは、n組の集合Xiからなる直積集合の部分集合、すなわちn項関係として定義される^(2,3)。

$$S \subset X_1 \times \dots \times X_n$$

認識する対象をどのような視点で捉えるかによりに、注目する要素もまたその要素間の関係も異なってくる。

例えばここに家族の集合があるとしよう。すなわち、 $F = \{a,b,c,d,e\}$ 。

各要素に次のような意味を与える名辞ラベルを用意する； a = 父, b = 母, c = 長男, d = 長女, e = 次女。

誰と誰が親子であるかに関心があるならば、システム S_1 は、

$$S_1 \subset F \times F, \text{ ただし } S_1 = \{(ac), (ad), (ae), (bc), (bd), (be)\},$$

あるいは誰と誰が夫婦であるかを知りたければ、システム S_2 は、

$$S_2 \subset F \times F, \text{ ただし } S_2 = \{(a,b)\},$$

と認識される。この家族の誰と誰が兄弟であるかに関心がある場合、そのシステム S_3 は、

$$S_3 \subset F \times F, \text{ ただし } S_3 = \phi,$$

となる。この関係を満足する要素は存在しないから、対象はシステムとして認識されない。もちろん誰と誰が姉妹という視点から捉えれば、対象はシステムとして認識される。

このように認識された関係は、それだけでは分析するうえで十分な構造を持たない場合が多い。一般に、関係を構成する集合（システムオブジェクトという）やオブジェクトの要素に対して、その特徴に応じた構造を追加することによって、より詳細なシステムの性質を調べることが出来る。例えばシステムの振舞いの時間的変化が重要な意味を持つシステムであれば、システムオブジェクトの要素に「時間関数」を定義することにより、動的システムとしての記述が可能になる。時間が連続であれば微分方程式で、離散的であればオートマトンで記述される。システムオブジェクト間の性質をより詳しく調べるために、オブジェクト間に関係としての構造を入れることも出来る。順序構造、代数構造、あるいは位相構造などがそうである。先の家族の例では、そのオブジェクトに対して年齢に関する順序関係を入れれば、年長、年少関係という構造が付加される。

また、 n 組のシステムオブジェクトに対して k 組のシステムオブジェクトを入力オブジェクト、 $n - k$ 組のシステムオブジェクトを出力オブジェクトとすれば、入力出力システム、あるいは因果的システムの記述が可能となる。

すなわち、

$$X = V_1 \times \dots \times V_k$$

$$Y = V_{k+1} \times \dots \times V_n$$

とするとき改めて、

$$S \subset X \times Y$$

とすれば、 S は入力出力システムとなる。

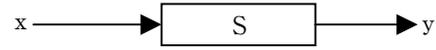


図-1. 入力出力システム

図-1ではシステム S を関数的に表現しているが、一般にシステム S は関数的ではない。補助的な変数の集合（状態集合）と、補助関数を導入することで、システム S をいつでも関数的システムに構成できる。

入力出力システムは、入力と出力の間に因果的な関係を想定できる対象に対して、広く適用できるシステムモデルであるが、この入力出力システムに「目的関」を繰り返すことにより、目標追求システムを構成することが出来る。目標追求システムは所与の目標を達成するために、決定基準に基づいて最も望ましい「行動」を選択し実行するシステムである。人を構成要素とする組織や、ゲーム、また人工システムなどは目標追求システムとしてモデル化することが出来る。

目標追求システムモデルは、一般には $D = (X, Y, M, V, P, G)$ の6項組で与えられる。ここで、 X は外乱としての入力集合、 Y は結果としての出力集合、 M は行動（操作変数）の集合、 V は評価の値集合、 P は、

$$P : M \times X \rightarrow Y$$

なる関数で、プロセスを表わす。 G は目的関数で、

$$G : M \times X \times Y \rightarrow V$$

で与えられる。 ψ は決定原理である。なお、目標追求システムは N . ウィナーのフィードバックシステムと同型であるため、サイバネティックシステムとも呼ばれる。

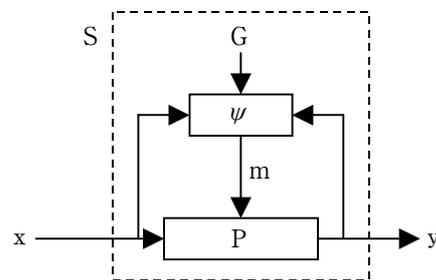


図-2. 目標追求システム

システムアプローチはこのように、対象をシステムとして捉え、対象の全体性とその特性を生み出すシステム構成要素の関係性や、その関係構造が生み出すシステムの性質を、モデルに表現し記述していこうとするものである。

1. 2. ポリエージェントシステム

それではコミュニケーションは、システムとして認識可能であろうか。コミュニケーションという行為においては、上にも述べたように、自己と他者の間に、メッセージの交換という二項関係が存在するから、システムとみなすことが出来る。われわれのモデルに従えば、より正確には自己と他者を、内部モデルを持つ自律的エージェントとして捉え、両者の間の交換関係としてコミュニケーションシステムが定義される。自律的エージェント自体は目標追求システムとして定義される。このような複数のエージェントからなるシステムをポリエージェントシステムとも呼ぶ。

われわれはこの自律的エージェントからなるポリエージェントシステムとして、コミュニケーションモデルを構築するという方法を取る。内部モデルについては改めて次節でとりあげる。

2. 相互主観性と内部モデル原理

2. 1. 相互主観性

コミュニケーションは、その中心問題の一つがメッセージの交換を介した相互理解、あるいは“他者理解”の問題である。いかにして自己は他者を理解しうるかは、哲学的な課題としても取り上げられてきた大きなテーマであるが、何ものかに対する認識や解釈は、勝れて主観的な行為であることに思いを致せば、相互理解あるいは意味の共有はそれほど簡単ではないことが容易に想像される。

フッサールの創始による現象学は、デカルト的省察と同じ“*cogito ergo sum*”に認識の确实性の根拠を置きつつ、客観性の意味に深い反省を加え、超越論的自我（主観）から共同の自我あるいはモナダ的共同体（相互主観性）への移行の問題を、主要な哲学的課題としている。そこでは、客観性は相互主観性に置き換えられ、客観性は主観相互の関係として、主観性の視座から捉えることが可能となる。この考え方はフッサール後期における「ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学」（1936年）で、「生活世界」という主観的一相対的世界の概念に拡張される。生活世界とは、我々が日常に生活を営む、直接に知覚された世界である。その世界の生活者は互いにモナダ的共同体としての世界を意識し、その限りでその世界の「客観性」が保証される。しかしそれはあくまで生活世界内に留まる限りにおける限定的な客観性である。例えば生活世界同士が接触するとき、すなわち異なる文化の接触を考えればそのことが明らかとなる。コミュニケーションの基底には、まさにこの問題が横たわっている。

ちなみに「諸学の危機」に示されたフッサールの学問的態度は、デカルト的方法としての要素還元論やその主張に含まれる科学的客観性のドクサに対する方法論的改革とし

ても、社会学を始めとする社会科学、心理学や実存哲学、解釈学などの人間科学、また認知科学の広範な領域に大きな影響を与えることになった。例えば、フッサールが反省を促した要素還元論を方法論のコアに置く論理実証主義への批判と呼応して、ソシュールの構造言語学、マックス・ヴェーバーの了解社会学、ゲシュタルト心理学、レヴィ・ストロースの構造人類学などが挙げられる。これらはいずれも、要素還元とは異なる全体性の中で、要素の関係性とそのまとまりの理解と記述を行なうところに、学問的方法の特徴を持っている。

システム理論の分野においてはその立場がより明確である。フォン・ベルタランフィの一般システム理論を始めとして、M. D. メサロヴィッツ、高原康彦らの数理的一般システム理論、P. チェックランドのソフトシステム方法論、また最近における多主体複雑系（ポリエージェントシステム）の理論はいずれも、前節で示したシステム概念に基づいて、要素間の関係性と、関係性によって生み出される全体的特性に注目し、そのシステム記述を行なうという方法を取っている。システム理論の視点からは、主観性や相互主観性の問題を扱う方法として、生活世界に関する内部モデルを構成し、それを目標追求システムに埋め込むという方法が可能である。そうした取り組みによる研究としては、ゲームプレーヤーがそれぞれ主観的に知覚した戦略集合に基づいて、均衡解（ナッシュ均衡解）にいたるプロセスを分析するハイパーゲームや、ポリエージェントシステムとしての複雑系経済学の研究などがある^(4,5)。

2. 2. 内部モデル原理

内部モデル原理は、もともとは構造的に安定なフィードバック・レギュレータを実現するために、W. ウォンハムが提唱した制御方式の1つである。すなわち、外乱の振舞いが比較的穏やかな系においては、外乱の振舞いに関するモデルを制御システム内部に持ち、そのモデルに基づいてレギュレーションを行えば、より安定でスムーズな制御が実現できるというものである⁽⁶⁾。モデル内にモデルを持ち込むことから、その外乱に関するモデルは内部モデルと呼ばれる。外乱の内部モデルを持つことにより、外乱を観察することなく内部モデルにのみ基づいて、効率的なレギュレーションが可能となる。

ウォンハムの他にも、U. ナイサーが認知心理学の立場から、生命体が外部世界を知覚するための世界の参照枠組として、図式と呼ばれる構成物を知覚モデルに導入した⁽⁷⁾。図式は外部世界の空間配置や形だけでなく、意味を取り出す「装置」として知覚モデル内に位置づけられる。われわれの表現でいえば、ナイサーの図式は世界を解釈するための内部モデルであるといえる。ナイサーはさらに、知覚の

過程は外界から情報を得て図式そのものを修正するダイナミックなプロセス（自己組織化のプロセス）であることを、知覚循環モデルを構成して説明している。

認知科学、特に認知意味論の研究領域においても、内部モデルを言語認知における世界解釈の枠組みとして、言語構造と言語理解の研究が行なわれている。P.ジョンソン＝レアードの「メンタルモデル」やG.フォコニエの「メンタルスペース」などがそうである。例えば、「メンタルスペース」は、談話が行なわれている外部世界と言語構造（文法）の間にマッピングを入れることにより意味付けが行なわれる認知的インターフェースである。様相論理における「可能世界」のような、意味づけにかかわる全ての状況を含むユニバースとしての宇宙ではなく、談話が行なわれるその場面場面で想定される外部世界や、話し手の信念世界の一部を表す関係構造を持った集合として定義される。⁽⁸⁾

また、統計的決定モデルは、外界の認識モデルを内部モデルとして持つ例となっている。すなわち、不確実な自然に直面している意思決定者は、自然の状態に関する何がしかの認識に基づいて意思決定を行うのであるが、この認識モデルが、判断確率で表現された世界認識の内部モデルである。意思決定者は自然の状態に関する情報、すなわち自然の状態に関する確率変数の実現値を得ることにより、事前の判断を改め、より確実な条件下で意思決定を行うことが可能となる。そのとき、自然の状態の認識モデルとしての判断確率を改訂する手続きがベイズの定理にしたがって実行される⁽⁹⁾。

このように、システムの行動を記述するモデルの内部に、システム自身の世界認識のモデル、もしくはシステム自身の行動モデルを組み込んだモデル構成となっているのが内部モデル原理による分析枠組の特徴である。われわれが構成する内部モデルは、生活世界の解釈モデルとしての内部モデルである。われわれのコミュニケーションシステムモデルにおいても、自己と他者あるいは話者と聞き手は、この内部モデルを持つエージェントとして記述される。モデルの詳細な説明については節を改めて述べる。

3. コミュニケーション的行動と言語行為

先に触れたコミュニケーション的行動は、言語行為と二重の意味で不可分に結びついていると考えられる。

一つは、コミュニケーションの媒体として不可欠な言語（発話に限らず、他のシンボルに変換されたものも含める）の使用、もう一つは、コミュニケーション的行動と言語が誘発する行為の一体性である。

これらの特徴を持つコミュニケーションプロセスを明らかにするためには、言語分析的方法、特に語用論の適用が

必要となる。言語の意味を扱う方法のひとつに形式意味論がある。形式意味論は、命題論理および一階の述語論理にもとづく形式言語を用いて、命題や述語と呼ばれる文を、モデルあるいは構造と呼ばれる解釈枠組に対応させることにより、真偽性を論ずるものである。形式意味論においてはしかし、考慮される言語の性質はこの真偽性が全てであり、それ以外の性質は考察の対象とされない。語用論はその名が示すとおり、言語の用法に関係して顕れてくる言語のさまざまな性質を分析しようとするものである。

われわれが構築すべきコミュニケーションモデルも、このような語用論的意味を扱えることと、コミュニケーションが目的志向的であるという点において、さらに目的合理性概念をも含むものでなければならない。

目的志向的であるとする理由は、はじめに述べたように、コミュニケーションという行為は主体に何らかの必要性、もしくは意図、目的があつてその行為が生起すると考えられるからである。われわれは次節で紹介するJ.L.オースティンの真理概念および彼の創始した言語行為論における発語内行為、発語媒介行為および行為の適切性という概念を、われわれの目標追求システムモデルで再解釈することにより、コミュニケーションの行為的側面の特徴づけを行なう。

3. 1. オースティンの言語行為論

言語分析が目指すものは、「言語現象」の体系的理論の構築にあると考えられる。その方法としては二つの潮流が存在する。一つは現代論理学を基礎とする分析哲学の流れである。もう一つは、日常言語の使用の中で生起する様々の言語現象を、論理学における人工言語に還元することなく読み解こうとする、いわゆる日常言語学派の流れである。

オースティンは、この流れの中における日常言語分析を通じて、言語行為論を創始した言語哲学者として良く知られている。言語行為論はその後、J.サールらによって発展・深化された⁽¹⁰⁾。

オースティンの言語行為論は、そもそも英米の伝統的分析哲学の方法に対する批判の中で生まれてきたものである。分析哲学においては、言語とは意味を担いそれを伝達するもの、事実を記述するものという側面に主たる分析の関心があつた。それに対しオースティンは、もっぱら事実確認的機能のみに関心を向けるこの伝統的言語分析の方法を「記述主義的誤謬」として批判した。言語の持つ機能はこの様な事実確認的な機能だけでなく、命令や約束、宣誓といった発話に見られる行為遂行的な機能も重要な機能の一つであるとし、これらの機能を共に発話状況の中に位置付けることによって、言語行為全体にかかわる言語機能の解明を目指した^(11,12)。

3. 1. 1. オースティンの真理概念

オースティンの真理概念は古典論理における真理概念と異なり、状況依存的といわれる。その理由は、古典論理では言明の内容が照合される事象、あるいは事実の集まりがユニバースとしての世界であるのに対し、オースティンにおける言明は、類型（タイプ）としての世界と、言明がなされた状況、すなわち話者と聞き手が直接関係している事象や事実の集まりの一部としての部分世界、の両方に依存してその真偽が定まるからである。コミュニケーションの過程で、当事者が関与する状況と無関係な発話がなされたときには、発話は文自体としては意味を持ちえても言明としてはナンセンスである、ということは日常においてもしばしば経験するところである。

オースティンは言語行為論の中で、発話の類型を事実確認的発話と行為遂行的発話に分類し、事実確認的発話においてはその妥当性が真偽の確認に委ねられ、行為遂行的発話の妥当性は、発話が誘発する行為の適切性に委ねられるという二分法をまず示した。

事実確認的発話とは、事実の描写もしくは陳述を行なうことにより、意味あるいは真偽に関する主張を行なうものである。通常は、命題あるいは言明と呼ばれる言語形式で表現される。言明はどのような場合に真とみなされるかについて、オースティンは次の二つの規約（convention）を用意した⁽¹³⁾。

1) 記述的規約（descriptive convention）；

文を世界の中に見い出される状況や事物、事象などの類型と対応させる写像。

2) 指示的規約（demonstrative convention）；

言明を、世界の中に見い出される歴史的状況に対応させる写像。

ここで、オースティンが言う文と言明について、「文は言葉から組み立てられ、言明は言葉においてなされる」という用法の違いがあることを注意しておこう。

類型とは世界の事物、事象に関する『標準的事態』を意味するものであり、世界を認識する枠組みである。類型によって類別された世界は、われわれの視点からは、世界に関するモデルと解釈される。歴史的状況とは、言明がなされた実際の状況に対応するものと考えられる。先の言い方を繰り返せば、話者と聞き手が直接かかわっている現実の部分世界である。

以上の規約の下で、言明が真となるのは、指示的規約によって対応する歴史的状況が、記述的規約によって対応する状況の類型に属するときであると定義される。つまり、発話において表現された内容すなわち文は、事象・事物に関するある類型を記述していると考えられるが、発話の行なわれた現実の状況の中にその類型の対応物としての事象

なり事物が存在するかが問題とされる。対応物が存在すればその命題は真とみなされる。この関係を示せば下図の通りである

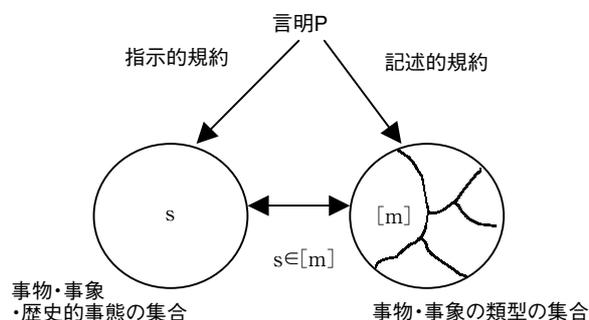


図-3. オースティンの真理概念

オースティンが示したこの真理概念に基づく意味論は、フレーゲ・ラッセル的論理学における外延の意味論、すなわち指示物の存在（真理条件）と意味を同一視する意味論とは異なり、記述的規約によって与えられる意味と、指示的規約によって与えられる真理条件を明確に区別したものとなっている。ちなみにフレーゲはこの区別を、意味（Bedeutung）と意義（Sinn）の区別として意識していたが、最終的にフレーゲは、真理条件と意味を同じと見做す方法を採用した。

次に、コミュニケーションの問題を言語行為の問題として扱う上で重要な示唆を与える、行為遂行的発話における発語行為、発語内行為、発語媒介行為および適切性という概念について、われわれの立場からその意味付けを行う。

3. 1. 2. 行為遂行的発話

行為遂行的発話（performative utterances）とは、例えば命令する、誓う、約束する、質問するなどのように、適切な（felicitous）行為を誘発する機能を持つ発話をいう。

この場合、発話の評価は真偽性によるのではなく、行為遂行的発話によって期待される行為が適切か不適切（infelicitous）かで判断される。当然ながら適切・不適切の評価は、話者の発話に含意される行為期待が、聞き手の応答に反映されているか否かによって判断されることになる。換言すれば、言語行為における「意味」は話者の発話だけ

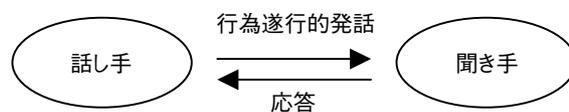


図-4. 言語行為における意味確定プロセス

では完結せず、聞き手の応答を待つて初めて確定するといえる。

オースティンの言語観は、実はこの二つの機能すなわち、事実を描写し内容を記述する機能と、行為を誘発する機能が事実確認的発話においても、行為遂行的な発話においても分かち難く結び付いており、あらゆる発話がこの二つの機能を備えているというものである。すなわち、事実確認的発話は、真理主張という他者に向けられた妥当性の要求という行為期待的側面を持ち、一方、行為遂行的な発話を行なうにあたっては、適切な行為を期待するに足る事実確認を前提して発話されるといった側面を持っているのである⁽¹⁴⁾。なお、行為遂行的発話に関連して、オースティンはあらゆる発話が次の三つの重層的行為からなる言語行為であるとした。すなわち、

1) 発話行為 (locutionary act) : 発話する行為それ自体。

われわれは発話の意図もしくは目的を、その背後に持つものと仮定する。

2) 発話内行為 (illocutionary act) : 話者あるいは聞き手に対する含意された行為。

われわれはこれを、相手 (特別の場合として自分を含む) に対する行為期待と解釈する。

3) 発話媒介行為 (perlocutionary act) : 誘発された行為。

行為期待の”実現値”であり、発話によって誘発された実際の行為と解釈される。

オースティンの言語行為論は基本的には一人の話者もしくは聞き手の立場からのものであり、相手とのやり取りを行うコミュニケーション的状况を前提としたものではない。そのため、コミュニケーション的状况の下では発話内容に関する意味理解と妥当性 (真偽) の確認 (これらを意味充足と呼ぶ)、および発話媒介行為すなわち行為期待の実現値の適切性の確認 (これを行為期待充足と呼ぶ) が話者自身の中では完結しない、ということが常態となることに注意しなければならない。

コミュニケーション的行為の確定プロセスは、より正確には意味充足過程と行為期待充足過程という、2つのプロセスから構成される。話者の発話の意味は、まず聞き手の

側で充足されて初めて意味の伝達が成立する。そして話者からの発話内容に含意される行為期待が、聞き手からの応答によって話者の側で充足されて初めて、話者の意図にしたがうコミュニケーションが成立したといえるのである。図-5に改めてそのプロセスを示す。

3. 1. 3. 言語行為と目標追求行動

オースティンの言語行為論は、上に述べたようにあらゆる発話がある意図・目的の下で発せられ、それには行為期待が含意されること、そして最終的にその期待される行為が適切なものであるか否かが聞き手の応答によって評価されるという特徴を持っている。この特徴は我々が日常的に行なうコミュニケーションの基本的特徴でもあり、また意図と行為に注目するならば、先に示したように、それは典型的な目標追求行動とみなすことができる。

われわれはこの目標追求システムモデルに次節で説明する内部モデルを埋め込み、コミュニケーションの一般モデルを構成していく。

3. 2. モデル表現

目標追求行動としてのコミュニケーションにおける、意味理解と行動評価に関する基本概念を、オースティンに従って次のようにモデル化する。

発話における事実確認的側面について、発話内容が記述的規約によって対応づけられる事象および事物の種類のクラスを、われわれは話者が持つ世界に関する内部モデルと解釈し、この世界モデルに基づいて発話の意味理解を行なうと考える。この意味で記述的規約は、言語からモデルへの解釈関数とみなされる。同様に、指示的規約によって対応づけられる歴史的 (現実的) 状況は、現実世界の一部として捉えられ、発話の妥当性に直接関係する対象となる。また、指示的規約は現実世界の観測を与えるものと考えられる。

ここで、オースティンに従った真理概念をもう一度振り返ると、発話 (言明) が真となるのは歴史的事態が標準的事態、すなわちある類型に属するときである。それでは、属さないときはその発話が直ちに偽とみなされるかという点必ずしもそうではない。それは真であると主張することには失敗したけれども、異なる状況下では同じ発話が真となりうる場合があるという可能性を常に残す、相対的な真理概念であることに注意しなければならない。

例えば次のような例を考えてみるとよい。「物理的な時間の長さはいつでも一定不変である」という会話は、それが交わされる場が特定の慣性系、例えば地球上であれば真と見做されるが、光速に近い速度で飛行する宇宙船と地球上の管制センターとの間で交わされる場合には、もはやそ

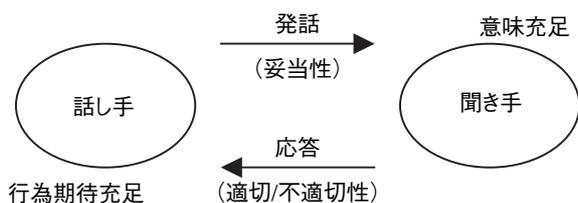


図-5. コミュニケーション的行為の確定プロセス

の言明は真とはみなされない。すなわち、ある状況のもとでは真と看做されていたものが他の状況下では偽となることもありうる。

いずれにしても、指示的規約を変更することにより、異なる状況を対応させることが可能である。また記述的規約を変えることにより、解釈自体を変更することが可能である。

行為遂行的な側面については、その行動は、話者の発話に含まれる（相手に対する）行為期待が、相手の応答の中でどの程度充足されているかに基づいて評価される。充足されない場合の話者の行動選択は、事実確認的側面における場合と同様とする。つまり、解釈枠組みを変更するか、観測方法を変えるか、あるいは何もしないで従前通りの発話を行なうといった選択が可能である。

ここで、コミュニケーションが成立したか否かの評価は、最終的には関与者相互の行為期待がどの程度充足されたかに依存すると考えられる。というのも意味理解が成立しなければそもそも発話に含意される行為期待は充足不可能であるし、さらに意味理解が成立していても、意図、目的により、それが行動に反映されない発話がありうるからである。以上の議論に基づいて、言語行為の内部モデル表現を改めて図式化したものが、下の図-6である。

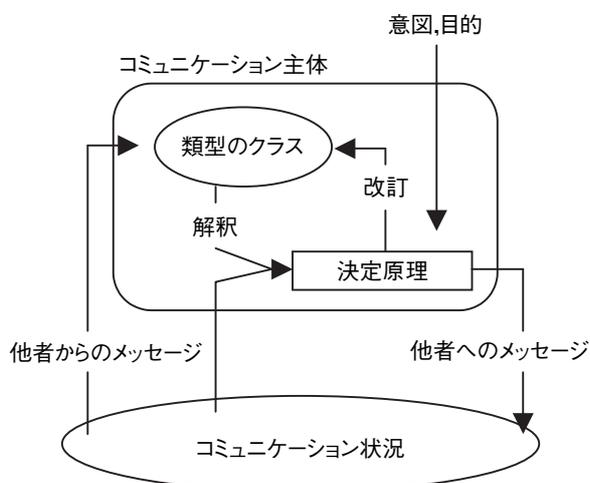


図-6. 言語行為の内部モデル表現

このモデルの基本的な諸前提について、いまいちど整理しておく。

- 1) 発話は常に何らかの意図・目的に基づいて行なわれる。
- 2) 事象・事物のタイプすなわち類型のクラスが外部世界すなわち、他者からの発話を解釈する（意味付けを行う）コミュニケーション主体の内部モデルである。
- 3) 他者からの発話を意味付けのための内部モデルの要素（ある類型）に対応させるものが、記述的規約である。

このとき、発話内容がどの類型とも対応しない、すなわち発話の意味が定まらないというケースも有り得る。その場合にはモデルの改訂もしくは修正という問題が発生する。コミュニケーションを通じて相互が意味共有を行うというプロセスは、それぞれの主体の内部モデル改訂のプロセスと見做すことができる。

- 4) ここでは明示的に表示されていないが、他者からの発話を状況の特定の事象・事物に対応させるものが、指示的規約である。
- 5) 決定原理に向かう矢印は、類型のクラスと状況（事象・事物のクラス）の間の関係を示すもので、3.1.1.節で与えた所属関係、 $s \in [m]$ である。ここで、 s は状況の要素、 $[m]$ は類型のクラスの要素である。この関係によって妥当性（真偽）の確認が行なわれる。状況は、コミュニケーション主体が直接関与する事象・事物のクラスであり、ユニバースとしての世界の部分世界である。
状況が不変のとき、 $s \in [m]$ なら真、そうでなければ偽である。
- 6) 決定原理は、所属関係を評価する妥当性判定（真偽判定）、および他者からの発話に含意される行為期待（発話内行為）に関する、コミュニケーション主体の意図・目的適合性判定（適切性判定）、および内部モデル改訂基準の三つからなる。

7) 日常のコミュニケーションにおいてはしばしば見られることであるが、反語的表現、皮肉、嘘という発話が行なわれる可能性がある。ここではコミュニケーションの整合性の条件として、次の6つの条件を課す。これはオースティンが、行為遂行的発話が適切であるための必要条件として掲げた条件である⁽¹⁵⁾。

- ・一般に受け入れられた慣習の存在すること。
- ・発動された手続きに対し、話者や状況が適切であること。
- ・手続きはすべての関与者によって正しく実行されること。
- ・手続きは完全に実行されること。
- ・手続きの関与者は発話内容に相応しい思考と感情および意図を実際に持っていること。
- ・関与者の行動は手続きを完了するまで継続的でなければならない。

要するに、主体は”誠実”にコミュニケーションを行うことを要請するものである。

4. コミュニケーションモデル

図-6の基本モデルと、前掲の諸前提にしたがって二者間のコミュニケーションをモデル化すると、図-7に示さ

れるコミュニケーションモデルを得る。このモデルにおいては、両者が共に同じ状況下でコミュニケーションを行なうものとしている。このモデルに基づけば、語彙の分節化するなわち、世界モデルにおける類型の細分化による意味の深化、また両者の世界モデルの間の対応を考え、それが準同形であれば意味の精粗はあっても意味を共有している、あるいは理解する世界が同じである、などの議論が可能となる。もちろん、話者がそれぞれ異なる状況下でコミュニケーションを行なう場合のモデル化も可能である。

多者間のコミュニケーションを考える場合には、形式的には発話入力、発話出力ともに多入力、多出力となるが、実際のプロセスにおいては、発話入力は1入力と考えてよい。なぜなら、われわれの言語能力はシーケンシャルな処理しか行えないからである。聖徳太子は7人の話を同時に理解したという故事があるが、仮に物理的には多入力であっても実質的な入力は1入力と見なしてよい。もちろん発話出力に関しては、多出力が可能である。例えば電子メールにおける同報送信はその典型と考えられる。

おわりに

本論でわれわれは相互主観的なコミュニケーションの問題を扱う上で、内部モデル原理とオースティン的方法が有

効であることを示した。またそれをモデル化する上で、言語行為論における「言うことは為すことである」が含意する発話の意図性、行為性が、目標追求システムの枠組みで捉え直せることを示すとともに、二者間のコミュニケーションモデルを定義した。

意味充足とモデルの改訂に関して、オースティンは、「I is a T」（ただし、Iは対象語、Tは類型語を表わす）という、ただひとつの形式文による発話だけが許される『言語状況 S0』というモデルを考え、「名付け違い」、「指し違い」、「同定違い」および「知覚違い」などの、聞き手を誤解に導くケースの分析とともに、語彙の分節化による意味の深化の問題を扱っている⁽¹⁶⁾。内部モデルによる意味解釈とモデル改訂のプロセスを考察する上で、オースティンが示した方法は示唆的である。この“is a”関係は、対象語と類型語を結び付けるものであるが、先に妥当性の条件としてあげた所属関係、“ $s \in [m]$ ”に対応するものである。図-8は、オースティンの図式⁽¹⁷⁾を基にして、その対応関係を示したものである。

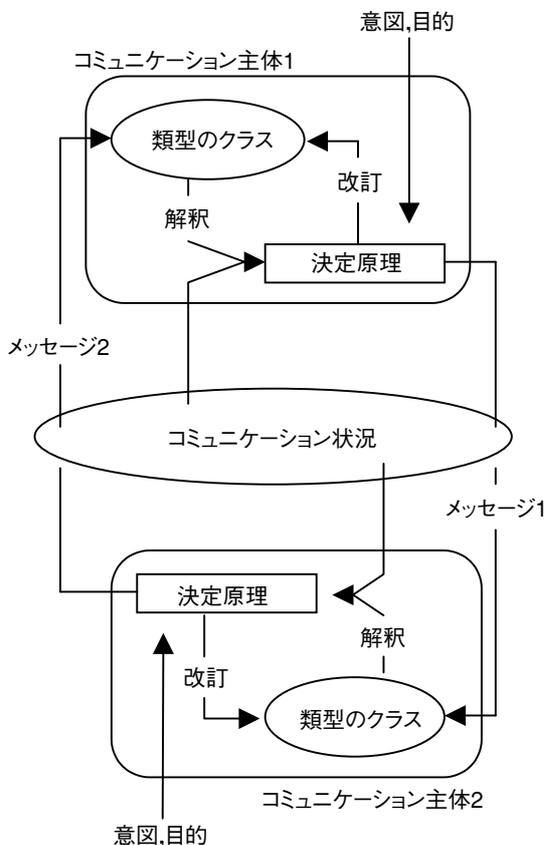


図-7. コミュニケーションシステムの二者モデル

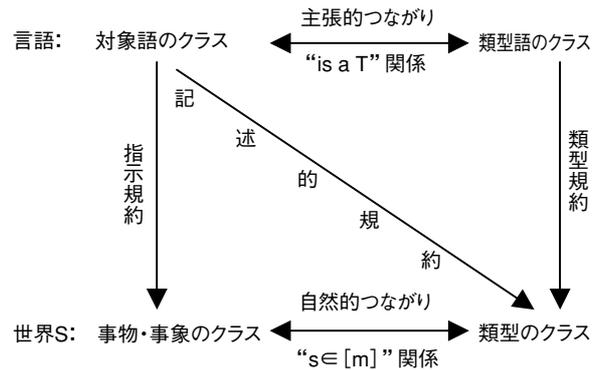


図-8. 言語Lと世界Sの対応

ここで、言語Lは、定項として対象語とタイプ語のクラスからなり、唯一の2項述語“is a”，および論理記号として“not”を持つものとする。一方、世界Sは事物・事象のクラスとしての状況と、類型のクラスからなるものとするれば、言語Lの対象語を世界の事物に対応させる指示規約と、言語Lの類型語を、世界の類型に対応させる類型規約によって、“I is a T”と $s \in [m]$ の対応が得られる。また、対象語と類型は、先の真理条件（図-3参照）における記述的規約によって内部モデルによる意味づけと妥当性の確認、およびモデル改訂の問題はこの枠組みの上で論じられることになる。次稿ではこの対応関係に基づいて、内部モデルによる意味づけと妥当性の条件を、厳密に定義する。

参考・引用文献

- (1) 宮崎正史「コミュニケーションの一般モデルの構築に向けて」広島女子商短期大学紀要第7号, '96
- (2) M. D. Mesarovic, Y. Takahara *General Systems Theory: Mathematical Foundations, Academic Press*, '70
- (3) M. D. Mesarovic, Y. Takahara, *Abstract Systems Theory, Springer-Verlag*, '89
- (4) 木嶋恭一『交渉とアコモデーション』日科技連, '96
- (5) 出口弘『複雑系としての経済学』日科技連, 2000
- (6) W. M. Wornham "Towards an Abstract Internal Model Principle", IEEE, Vol.SMC-6, No.11, Nov. '76
- (7) Ulric Neisser, *Cognition and Reality*, W.H.Freeman, '76
- (8) Gilles Fauconnier *Mappings in Thoughts and Languages*, Cambridge Univ. Press, '97
ジル・フォコニエ著, 坂原茂他訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店, 2000
- (9) 宮沢光一『情報・決定論序説』岩波書店, '75
- (10) John R. Searle, *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, '69
J.R. サール著, 坂本百大, 土屋俊訳『言語行為』勁草書房, '86
- (11) J. L. Austin, *How to do Things with Words*, Oxford University, 1975 (revised edition)
J.L. オースティン著, 坂本百大訳『言語と行為』大修館, '78
- (12) J. L. Austin, *Philosophical Papers*, J.O. Urmson, G.J. Warnock ed, Oxford University Press, '79 (3rd edition)
J.L. オースティン著, 坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房, '81
- (13) 前掲書『オースティン哲学論文集』中の「真理」
- (14) 野家啓一『言語行為の現象学』勁草書房, '93
- (15) 前掲書『言語と行為』pp26 ~ pp27
- (16) 前掲書『オースティン哲学論文集』中の「語るとはどういうことか」
- (17) 前掲書「語るとはどういうことか」pp214

